

Title	マルシイ著 集産主義の建設者コンスタンタン・ペクールを読む
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.7 (1936. 7) ,p.1069(115)- 1080(126)
JaLC DOI	10.14991/001.19360701-0115
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360701-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原 戸 一 郎 殿

菊間村に於いてこれだけの圍穀をなし得たことはかなり上出来であつたと思はれる。「餘豊備凶」なる一寫本には、「天保九成春以來冷氣之氣候の處、四月天氣續、五月廿八日迄土用前四五日暑ニ向ひ處、廿九日土用入々冷氣雨漸、五日(六月?)晝々天氣ニ成り得共、暑無之」とあり、あまり順潮とも思はれない。菊間村は天保十年の「上總壹ヶ國石高村數帳」に依ると千三百五拾四石の村高ではあつたが、相當富有な村であつたと思はれる。

しかしこの圍穀令が十分に實行されなかつたことは、天保十三年遠山左衛門尉景元が鳥居甲斐守忠耀と連名して上申せる意見書中に、御府内は云ふに及ばず、代官、領主、地頭を督促して圍穀を爲さしめ、非常の用に備へさすべしと云つて居り、勘定奉行より圍穀の獎勵を申渡してゐるのを見ても推測出来る。(これ等の點は幸田成友氏「日本經濟史研究」五五〇頁以下に據る)。勿論それは歸農を目的とするものではあるが、もし以前の命令に依つて農村の圍穀が相當に行はれてゐたのならば、かうした意見は生じないであらう。要するに天保八年の圍穀令は凶作の對策として當然當時の社會組織の下に於いてはなさるべきものではあつたが、法として不備の點が少なくないばかりではなく、當時の農村の疲弊は到底これを實行し得るものでなかつたのである。菊間村外拾三ヶ村からなる八幡村組合に於いて菊間村以外の實例がない。それ等については未だ十分の資料を得てゐない。又菊間村の貯穀が後に如何なつたかについては全く不明である。さらにこの圍穀令は夫食と密接な關係があることは上掲の原文に依つても知られるが、未だ十分の資料を得てゐない。それ等については何れも他日を期するより外にない。唯この圍穀令について言及せるものを、私の知れる限りでは、發見し得なかつたから、敢て紹介を試みた次第である。

(昭和十一年六月十七日稿)

マルシイ著『集産主義の建設者』コンスタンタン・

ペクール』を讀む

平 井 新

(一)

コンスタンタン・ペクール(Constantin, Nicolas, Séraphin Pecqueur)とは何人であるか。恐らく此名に首を傾ぐる讀者は決して尠くはあまい。事實、著名なる辭典類ですら彼の名を掲げて居ない。例之フランスのラルッス Larousse ドイツの Brockhaus の如きは之である。Larousse illustre の附録は彼の極く簡短なる傳を掲げては居るが、彼の人物、業績については殆んど全く述べて居ない。

然らばペクールは經濟學說史家に依り、より知られて居たかと言ふに、そうでも無い。ジード、リスト共著『經濟學說史』は、ペクールが一八四八年のリュクサンブル委員會に参加せし旨を一言述べ、次でペクールは恐らくマルクスに對し影響を與へたるならんとの示唆的脚註を附したるのみにて、更に此問題を究明しては居ない。Maurice Bourguin 著 “Les systèmes socialistes” は彼の名さへ擧げては居ない。斯る事實に依て、ペクールの

人物及體系に對する世人の認識程度を略推測する事が出来る。併し乍ら、斯るペクールの無名は、決して彼の人物

マルシイ著『集産主義の建設者』コンスタンタン・ペクール』を讀む

一一五 (一〇六九)

及體系の價值少なきに囚るものでは無く、専ら之に對する究明認識の不充分なるに基くものである。

(二)

コンスタンタン・ペクルは一八〇一年十月二十六日、北佛 Arleux に生れ、一八三五年より一八五〇年迄専ら巴里に在住して著述の外に *Globe*, *Revue du Progrès*, *Revue démocratique*, *Dictionnaire de la Conversation*, *Salut du Peuple* 等の多數雑誌に寄稿した。彼は専ら「自己の思想に依てのみ生き、自己の思想の爲めにのみ生きる所の純粹の學者」として終始し、一八四八年二月革命の際 Louis Blanc, Victor Considérant, François Vidal 等と共にリ・クサンブール委員會に參與せし以外は實際政治の街頭に出づる事はなかつた。同年、國民議會附屬圖書館副館長に任命せられ、初めて、稍安定せる生活を獲得する事が出来たが、一八五一年十二月のクーデター後は、自ら此地位を放棄して、初め Ville d'Aray に卜居し、後 Seine-et-Oise の Taverny-Saint-Leu に遁世自適したが一八八七年十二月十九日、八十六歳の頽齡を以て、全く世人の忘却裡に、この世を去つた。

ペクルの著作は頗る多く一々列記の煩に堪へないが、茲に重要なもののみを挙げれば、先づ指を屈すべきものは一八三七年 *Académie des Sciences morales et politiques* の懸賞課題に應募して受賞の榮を膺へる二卷の大作 *“Economie sociale des intérêts du Commerce, de l'industrie, de l'agriculture et de la civilisation en général, sous l'influence des applications de la vapeur”* である。本書は爾後數版を重ねるの好評を博し、ペクル自身の證言によれば、本書は已に彼の後年の根本思想たる國家社會主義理論を包含したものである。

一八三九年、彼の新著 *Des Améliorations matérielles dans leurs rapports avec la liberté* が公刊された。本書は、著者自身の記する所によれば、古典研究を終へて、直ちに實社會に這入る事を余儀なくさるゝ所の青年に獻與せられ

たもので、その使命は、凡て物質的改善は總ての人々對し自由の増大を齎らすものである事を知らしむるに在つた。

一八四二年には重要な三著作が續いて出版せられて居る。其一是、*“De la Paix, de son Principe et de sa réalisation”* である。本書は専ら國際關係を論じたもので、國際關係を國家間の仲裁と國際聯盟によつて改善せん事を提唱せしものである。其二是、*“Des Armées dans leurs rapports avec l'individu, la morale, et la liberté ou des devoirs civiques des militaires”* である。ペクルは本書に於て痛烈に常備軍制を攻撃し、之を無秩序及腐敗の根源なりと論じて居る。同年最後の著書は *“Théorie nouvelle d'économie sociale et politique, ou études sur l'organisation des sociétés”* と題し、彼が集産主義理論を體系的に、理論的に、而も詳細に論述せる老犬九〇〇頁に亙る畢生の力作である。彼が社會主義理論は茲に最後の、全貌的展開を見せて居るのであつて、彼が思想體系を把握する上に於て最も緊要なる著作である。

一八四四年には彼が生涯の最後の著作たる *“De la République de Dieu”* が刊行せられた。本書は彼の體系中特に宗教的、道德的方面を展開し且つ強調せし以外には前記諸著作の骨旨を反覆要約せしものである。上記の諸著作の外既發表並に未發表の論作等、頗る多量である。

(三)

ペクルの社會思想は國家社會主義の典型的なるものである。素より國家社會主義者と目すべき人物は彼以前にも存在する。併し乍ら國家社會主義を體系的に、理論的に且つ仔細に互て説述せる者に至つては恐らく彼を以て嚆矢とすべきであらう。

ペクルの國家社會主義を特徴付けるものは先づ彼の理想主義的、唯心論的、樂觀論的傾向である。彼が社會主

義者たる事を自任するのは實に道德的理想の名に於てである。彼が自己の體系を通じて終始、信奉する所の原則は(一)己の欲せざる所を人に施す事勿れ (二)己の欲するが如く人を遇せよ (三)己自身と同様に隣人を愛せよとの三ヶ條である。かく理想主義者であり、唯心論者なるが故に彼は又理念の全能を確信する。彼が經濟的進化を道德的進化に依據せしむる所以である。

ペクルールは何よりも先づ博愛と慈善とを信條とする人物である。彼が世界改造を志すのは神愛及人類愛の名に於てである。彼の全著作は孰れも斯る種類の考慮に發足する。それ故に彼は古典派經濟學と正反對の地歩に立つ。彼によれば古典派經濟學にとつて經濟學は富を支配する法則の學であり、富が如何に形成せられ、分配せられ、消費せらるゝやの方法に關する學、換言すれば純乎たる致富の學である。従て道德的秩序に關する一切の考慮は斯學より除外せられた。スミス然り、リカルド、セイ又然りである。殊にシニョアに至ては經濟學を道德的、感情的秩序の一切の關心から解放した。

ペクルールの經濟學觀は之と全く選を異にする。彼によれば經濟學は幸福の學であり、その研究領域は古典派のそれにして遙に廣大である。即ち彼に取つて『經濟學は現在及過去に於て物質的富が如何に形成せられ、分配せられ、消費せらるゝやを教へる所の無味乾燥の分析ではなくして、總ゆる種類の富が正に如何に形成せられ、分配せられ、消費せらるべきかを教へる所の生ける科學である』。

彼の方法論は又古典派のそれと全く相通する所がない。古典派の方法が分析的、歴史的、觀照的なるに對して彼の方法は抽象的、演繹的、非現實的である。

ペクルールによれば無政府的生産、自由競争、失業、勞働階級の貧窮、分配の不正——是等が資本主義社會の禍悪

である。而して是等の禍悪は結局生産手段の私有の事實に還元される。總て是等の情弊を剷滅するの道は土地及勞働手段の社會化以外にはない。『社會經濟に於ける眞理たり、善たるものは富の源泉、勞働要具、一般的厚生條件の果進的社會化であらう』と(一)ペクルールは資本主義社會の斷乎たる反對者である。生産手段の私有廢止は彼の念願である。

既に生産手段社會化の將來社會の實現が望まじきものとすれば如何にして之を實現するや。ペクルールによれば現行社會の物質的進化は勞働要具並に一切の富の源泉又は條件の社會化の方向に向てゐる。集産主義の時代は日々準備せられつゝあるのである。彼は資本主義社會が社會主義の方向に向て進展しつゝあるの事實を確信するものである。而して此將來社會への進展傾向を助成し、強化するの道は大衆の教化、道德化以外には存しない。謂へらく『革命が精神の中に於て遂行せらるゝ時は總て制度上の革命も亦平和裡に遂行せらるゝであらう。吾人は道德的改善によつて初めて社會的並に物質的改善を達成し得る。従て道德、開明にして宗教的なる意志、之が一切の社會的運動及一切の進歩の發足點であり、原動力である』と(二)

ペクルールが集産社會實現の手段として擇ぶ所の方法は本質的に平和的である。『暴力は何人も之に諮てはならぬ憂ふべき極端事である』(三) 『革命は騷擾と暴力によつて事態と關係なき結果を生む』(四) 『暴力、掠奪、戰爭、總て之れ憤怒と報復心によつて惹起せられたる窺策である。感情と思想を更新すること、之れ目的であり、説服する事之れ手段である』(五) 茲にペクルールの眞意が存在する。

以上はペクルールの體系の瞥見的説明である。

(一) Pequeur; Economie sociale des interets du commerce. 2. éd. 1889. p. XII.

マルセイ著『集産主義の建設者コンスタンタン・ペクルール』を讀む

マルセイ著『集産主義の建設者コンスタンタン・ペクル』を讀む

110 (1074)

- (31) Pecqueur; De la paix, de son principe et de sa réalisation. 1842 p. 67, 155, 159.
- (32) Pecqueur; Des Améliorations matérielles 2. éd., 1843. p. 163, 173.
- (4) Pecqueur; De la République de Dieu p. 119, 271.
- (5) Pecqueur; Le salut du peuple. n. 1, p. 5.

(四)

ペクルの近世社會主義史上に於ける地位は十九世紀社會主義史上の二大明星サン・シモン及シャルル・フーリエと對比する事によつて一層鮮明となるであらう。

ペクルは此近世社會主義の兩巨擘に負ふ所頗る大であつた。ペクルは自己の思想體系形成過程に於て先づサン・シモンの洗禮を受けて居る。事實彼は一八三〇年乃至一八三二年、全くサン・シモン主義に歸依し、此運動に於て重大なる役割を勤め、此新宗教の傳道者の一人となつたのであるが、一八三一年十二月、サン・シモン主義陣營内に分裂生じ、ペクル又サン・シモン主義が個人的自由と國民代表制を承認せざる事に慍然として、此運動より身を退いた。一八三三年フーリエ主義を究めて、之に傾倒するに至り、爾來一八三六年に至る迄約三年間、ヴィトル・コンシデランを援けてサン・シモン主義者たりし場合と同様に、此運動に重要な役割を演じたが、久しからずして、彼はフーリエ主義は強制的權力の正當性を否認し、一切の強制を不必要となすが故にその歸する所は結局放肆と無政府に外ならずと看做して、全體としてフーリエ主義を放棄し、爾來斯種思想運動より一切退いて、専心自家固有の體系の建設に精進するに至た。

ペクルの體系は實にサン・シモンとフーリエとの止揚である。サン・シモンに對しては、その「社會的、政治的、歴

史的方面」を負ひ、フーリエに對しては「組合及連帶の物質的方面」を負ふものであるが、殊にペクルが前者に鼓吹せられし點はその政治的方面即ち將來社會に於ける「權威」不可缺の思想であり、後者フーリエに啓發せられし所は組合思想並に資本制社會の分析及批評である。サン・シモンとフーリエとは「權威」を繞て對立する兩極である。サン・シモンは絶對的權威主義者であり、フーリエは一切の強制を無用と看做す排權威主義者である。ペクルは「權威」の不可缺をサン・シモンに學ぶものであるが、至高の神政政治のために、個人的自由と國民的代表制とを拒否するサン・シモンの教義に對し民主的選舉制を對抗せしむる。換言すればサン・シモンの「絶對的權威」に對して自由を對立せしむる。ペクルは相對的權威主義者である。彼が求むる集産社會に於ける國家の本質は斯る性質のものである。即ち民主的國家である。ペクルは組合思想を深くフーリエに負ふものであるが、フーリエの排權威思想を承認しない。即ちペクルは「強制的權力の正當性を拒否し、一切の強制を無用とするフーリエ主義に對して、法律的義務的權威の原理」を對立せしむる。此點に於いてペクルはサン・シモンとフーリエの兩極の中間に介在するものである。凡そ十九世紀前半の社會主義者中資本主義社會に對して、獨自の、犀利にして、深刻なる分析及批評を加へた最初の人物は疑も無くフーリエであらう。而してペクルの現代社會に對する分析及批評眼は大部分フーリエによつて開かれたものであると言ふも過言ではあるまい。尙、彼と同時代の社會主義理論家ルイ・ブラン、カベ、ヴィダール、ブルードン等との關連については興味少なくないが、茲では述べなす。

カルル・マルクスとの關聯に就て一言述べ度す。

マルクスがサン・シモン、フーリエの社會主義に對して「空想的」の文字を冠して、聊か輕侮的態度を示し、自ら優越感を誇示した事は周知の事實である。然し乍ら、他方に於てマルクスが彼等所謂「空想主義者」を相當高く評價し

マルセイ著『集産主義の建設者コンスタンタン・ペクル』を讀む

111 (1075)

て居る事は彼の諸著作に散見する彼等に關する口吻に依て略々推測される。而も殊にフリーエの分析眼批評眼に對しては、深くその炯眼、犀利に敬意を表し、その業績を高く評價して居た。而もマルクスがフリーエの教義に啓沃せられたのは先づ主としてペクルールの著作を通じてであると言はれて居る。事實マルクスは既に一八四四年代にセイ、シスモンデ、ビュレー(Bureau)等の著書と共にペクルールを読み、(1)後年殊に資本論に於て屢次、フリーエと共にペクルールを引用し、特に資本論第三卷第三十六章に於てはペクルールの“Théorie nouvelle d'économie sociale et politique”から長文の引用をなしてゐる。(2)是等の事實に徴してマルクスがペクルールを相當高く評價してゐた事が窺はれる。

マルクスに對するペクルールの影響を指摘した最初の學者は「共產黨宣言」の佛譯者であり、評釋者である Charles Andler である。彼によればペクルールは、フリードリッヒ・リストの獨逸に於けるが如く、フランスに於て唯物史觀の完全なる體系を建設した人物であつて、マルクスの唯物史觀は此のリストとペクルールの調和である。(3)アンデル氏と同巧異曲の所見を提唱するものに“Les Théories socialistes au XIXe siècle.” “Le Règne de Louis Philippe” (Histoire socialiste éd. par Jean Jaures. Tome VIII.) の著者として名ある Eugène Fournière がある。フルニエールも、亦ペクルールは既にマルクスに先立て唯物史觀を作成せし事を主張する。所説の當否は茲で論じないが兎も角ペクルール並にマルクス研究者にとつて一大興味たるを失はぬ。素よりアンデル、フルニエール程ではないがマルクスに對するペクルールの感化の重要性を説くものに Jacques Delevsky (4) 及 Deschamps (5) がある。彼等によれば、マルクスはペクルールの著作の中に唯物史觀の要素を見出す事は出来たが、唯物史觀其者を見出す事は出来なかつた。蓋しペクルールは唯心論者であつた。彼は環境、經濟的條件、技術の變化の社會進化に及ぼす影

響を研究した。しかし彼は唯是等の影響に依てのみ歴史を説明しなかつたと。兎まれ此等問題の解決は尙今後の詮索、討究に俟つべきであらう。

上述せし所に依て近世社會主義史上に於けるペクルールの地位が略々判明せし事と思ふ。

- (1) アドラッキー監修カール・マルクス年譜、昭和十一年改造社版三十三頁。
- (2) マルクスはシャル・ペクルールと書いてゐるが、これは彼の lapsus calami である事は明かである。資本論校訂者が此誤謬を看過したのは不注意と言はねばなるまい。今後、資本論の校訂者は其内外を問はず、必ず訂正すべきであらう。
- (3) Charles Andler; Le Manifeste Communiste. II. Commentaire. p. 73.
- (4) Delevsky; Les sources du Marxisme, Revue d'économie politique, 1930.
Les antinomies socialistes et l'évolution du socialisme français, 1930.
- (5) Deschamps; Cours d'histoire des doctrines économiques, 1930-1931.

(五)

ペクルールに關するモノグラフ的研究は甚だ尠い。初めて彼の重要性に着目した人は Benoit Malon であつた。一八八二年の頃マロン氏はペクルールを Taverny-Saint-Leu の遁居に訪れ、其會見記と實際ペクルール自身より手交された著作並に草稿目録とを雑誌 Revue moderne 紙上に發表し、一八八六年之を“Constantin Pecqueur d'après ses oeuvres”なる表題の小冊子として刊行した。一八九八年には Maisonneuve, — Pecqueur et Vidal. Contribution à l'histoire du collectivisme en France. thèse. Lyon. が刊行され、一九〇六年には Marié, Le Socialisme de Pecqueur. Thèse, Paris. が出版され、夫々ペクルール研究に寄與してゐる。一九三一年にはリヨン大學法學部教授 Etienne

Antonelli, 以下 “Constantin Pecqueur” なる僅々二十三頁の小冊子が公刊された。余は多年の念願に不拘、前記 Malou, Maisonneuve, Marie 等の著作を未だに入手し得ず、參讀し得ざる事を呉々も遺憾とする所である。アントネリ教授の研究は僅々二十三頁の小論文で、研究と言ふより寧ろペクルの體系の骨旨を撮要せる要領者と言ふべきもので、その中で教授は今日に於けるペクル再認識の必要を強調して居る。尙卷頭には四頁の略譜が附してある。モノグラフ的研究ではないがペクルの體系を高く評價するものにて前記の Andler, Fournière, Deschamps, Delevsky の外に Tugar-Baranowsky のある事を記し度し。

余が茲に紹介せんとす G. Marcy, — Constantin Pecqueur. Fondateur du Collectivisme d'état (1801-1887) Librairie Recueil Sirey. Paris, 1934 の出版は斯る寥々たるペクル研究界に對して一大貢獻をなせるものであると同時に、ペクル再認識に新なる刺激を與へたるものである事は疑を容れぬ。本書は一九三四年の刊行にかゝる菊版大、約二七〇頁、卷頭にはリール大學法學部教授 Bernard Lavergne の十頁の序文、卷末には文献目錄を附してゐる。本書の著者マルシイ氏が如何なる人なるやに就ては評者は全く知る所がないが、専ら本書を通じて窺ふに、著者マルシイが克明、周到にペクルの原著作を拾收涉獵せるの事實と近世社會主義思想に相當通曉せる學徒なる事は頷かれる。筆路決して流麗とは言ひ難いが、よく暢達、行論決して好奇の風なく、涉獵不撓克明にして動もすれば引用聊か煩雜冗長の觀なき非ざるが所説概ね妥當にして傾聴すべきもの頗る多く、隨に斯界に一大獻與をなすべき事は疑を容れぬ。

本書中興味深い部分は第五篇『經濟學說史上のペクル』であるが分けても同篇第三章『ペクルとカール・マルクス』は興味深く、ペクル研究者は勿論の事、マルクス研究者の看過すべからざる、示唆に富む文字である。

茲でマルシイ氏はペクルを以てマルクスの唯物史觀の先驅者なりとなす前記アンドレ、及フルニエールの所説を論駁する。

アンドレに依ればペクルは其著 “Economie sociale des intérêts du Commerce (1837)” 及び “Des Améliorations matérielles (1839)” に依てフランスに於て唯物史觀の完全なる體系を建設せし最初の人物である事恰もフリードリッヒ・リストが獨逸に於て該史觀の最初の建設者たると同様であると。又フルニエールは其著 “Le Règne de Louis Philippe” (Histoire socialiste, éd. par Jean Jaurès, Tome VIII) に於てペクルはマルクスに先んじて唯物史觀を作成したと主張する。

斯種見解に對してマルシイ氏は大要次の如く反駁して謂ふ、成程前記ペクルの諸著作中にはアンドレ及フルニエールの主張を裏書する多數の章句を發見するに困難ではない。併し乍ら、同時に又該著作中に於て、ペクルが社會の進化に對する神の干渉並に世界の運行に對する精神の影響を強調してゐる章句をも少なからず發見される。由來ペクルは決して一元的史觀論者ではない。彼によれば歴史の進化を決定するものは精神的要素、神意的要素及物質的要素の三つであるが、彼は結局物質に對する精神の優勢を確信するものである。物質的要素は精神的要素の活動を容易ならしむる所の二次的役割を演ずるにすぎない。隨にペクルは物質的要素の重要性をも主張してゐる。然し、それは歴史進化の決定に於て單に二次的の重要性を有するにすぎないと認めて居た。ペクルが生産力、社會の物質的發展の重要性に關してマルクスの注意を喚起した事は疑ない。マルクスがペクルから唯物史觀の或構成要素を借用した事、又マルクスがペクルが歴史解釋に於て物質的環境に重大なる役割を附與せし事實によつて影響せられた事は考へ得るが、併し乍らマルクスがペクルの著作中に唯物史觀を發見したとは到底考へら

れない。諸著作を通じて見れば、ベクルは所詮一個の理想主義者、觀念論者であると言ふ外はない。アンドレ、フルニエールの主張は詮索不足の、論據なき臆説であると。評者も亦大體に於てマルセイの所説を妥當と認め賛意を表するものである事を記して置く。

尙、第五篇第一章に於て對サン・シモン、フーリエの關係を論じたる部分、第二章に於てルイ・ブラン、カペー、ブルードン、ヴィダールとの關係を述べたる部分も亦興味少くない。

聊か揚足取りに失するやも知れぬが、評者が黙過し得ざる事はマルセイ氏が書中隨所に於てマルクスを *Collectivisme* を以て遇して居る點である。マルクシズムが *Collectivisme* に非ざる事は今更暇を要せぬ所である。當然 *Communiste*, *Communiste* の文字を以て代ゆるべきである。

今一つの遺憾事は斯種の周到眞摯なる研究に時代的背景、例之當時の思想的、經濟的狀勢の一般的論述を欠いてゐる事であつて、斯種の欠點は切角、著作の價値を減ずる事頗る大であると思ふ。眞摯なる、努力的著作である丈に斯種の點睛を欠いた事は著者のために呉々も惜まれてならぬ。兎まれ、本書が寥々たるベクル研究界に頗る大なる貢獻と刺激とを與へたる事は全く疑なき所、只にベクルに對してのみならず、一般社會思想に興味を有する人々の必ずや一讀すべき價値ある近來の快著として茲に敢て紹介の勞を取る所以である。

技術の進歩と失業

—W. Woytinsky; Drei Ursachen der Arbeitslosigkeit, 1935—

藤林敬三

茲數年來、各國に於いてその當面の失業問題に關聯して、屢々その主たる原因が生産技術の進歩にあると云はれて來てゐるのであるが、そしてまた一方に於いては失業問題の一對策として労働時間の著しい短縮が論議せられるに至つたことは、人の既に知る所であるが、果して技術の進歩が如何なる程度に於いて失業の増大を齎し得たかに關しては、不幸にして未だ何人も具體的にこれを知る術を見出し得なかつたのである。勿論部分的には先きにこれに關聯して E. F. Baker の印刷業に於ける甚だ有益なる研究があり、(註一) また昨年私が本誌上にその紹介の筆を執つた H. Jerome は詳細な分析的考慮から、各種産業部門に於ける技術の進歩に因る労働者排除の推定的計算のための諸種の統計的方法を示してゐる。しかし彼のやうに現實的研究を稍々詳細に分析的に掘り下げることの當然の結果は、一國の失業問題に對する技術進歩の影響を取り擧げることが寧ろ問題として殘されてゐる。(註二)

技術進歩の失業に對する影響を具體的に確證するための吾々の知識がかくの如き状態にあることは、一方吾々が